

2012ベルナー・オーバーラント登山報告

期間 2012.7.13~7.29

メンバー 古関正雄・山本大貴

山行内容 メンヒ南東稜・メンヒ南西稜・ロープヘルナー登攀・アイガー東山稜

I. 行動記録(メモ魔の古関日記より)

●7月13日(金) 晴れ 成田—香港—(古関)・成田—(山本)

2月から航空券を手配した古関と、6月になってから急きょ参加が決まった山本は往復とも違う航空機、違う経由地となり、スイスのチューリッヒ集合・解散という変則的なスタイルとなった。私にとっては8回目の海外での登山であり、理解ある家族と丈夫な体に感謝である。出発の数日前にカタール航空よりオーバースタッフの申し出があり、2万円の返金で香港—ドーハー—チューリッヒと経由地に香港が加わった。経由地の変更へのお詫びとこのことで出発まで成田空港内のラウンジの提供を受ける。アルコールも軽食もお代わり自由で搭乗前に遭難しそうである。香港でも私の名前を大きく書いたボードを持った係員が待っており、こちらでもラウンジの提供を受ける。香港のビールはぬるいが、食事は軽食ではなく本格的なものでお代わり自由。来年も是非オーバースタッフしてもらいたいものだ。

●7月14日(土) 晴れ ードーハーチューリッヒ(古関)・ードバイーチューリッヒ(山本)

チューリッヒ空港にて合流—ベルナーグリンデル・ワルト—ボーゲンワルトキャンプ場

ドーハの空港で携帯を海外仕様に変更するとちゃんと日本からのメールを受信する。エミレーツ航空でドバイ入りした山本からもメールが入り、ドバイの空港のラウンジに潜入したらしい。山本は初めての海外でどうも興奮してはしゃいでいるようだ。

チューリッヒ空港で山本と無事に合流し、空港の地下の国鉄駅へ向かう。スイス国内のほとんどの交通機関の値段が半額になるスイス半額カード(110CHF・1か月有効)を購入する。空港からグリンデルワルトまでの運賃も早速半額になる。スイスの鉄道は乗り心地がたいへん良く、北海道を思わせるようなどかな景色が続く。インターラーケンを過ぎると湖が展開し、だんだんと山が見えてくる。グリンデルワルトに近くなるといよいよアイガーが見え出す。北壁には雲がかかり中腹までしか見えない。グリンデルワルトの街は昨年のフランスのシャモニと比べると街が小さい印象を受けるが、アルプ(牧草地)におおわれた緑の谷は本当にきれいである。駅から数分のモンベルへ行きガスカートリッジを8.9CHFで購入する。プリムスも使われているが、青いカートリッジのキャンピングガスも多く使われている。モンベルの隣のCOOP(生協)で酒や食料を調達する。全般的に価格は高めだが、乳製品やアルコールは安い。閉店時に店内でさらに商品を探していた私たちは女性店員にえらい剣幕で怒られてしまった。



【Mont-bell と Coop】

タクシーが見つからないのでグリンデルワルトからキャンプ場まで歩く。グリンデルワルトは傾斜地が多いので荷物が重い私たちは一駅だがグルントまで電車に乗った方が賢明だったようだ。それでもきれいな花に飾られたグリンデルワルトの家を見ながら歩くのは楽しいものだ。無事キャンプ場に着き受



付を済ます。キャンプ場は広くテントを張る場所について細かい指示もなくおおらかで良い感じだ。受け付けはキオスクを兼ねており、アルコールやスナック菓子の販売、焼き立てパンの予約受付なども行っている。同敷地内にホテル兼レストランが併設されており、レストランからの出前サービスをキオスクで頼める。オートキャンプでバカンスを楽しむ人がほとんどだが、私たちのように山屋がアイガーの北壁を目の前にしたキャンプ場で過ごすことができるのは最高の幸せである。

●7月15日(日) 雨のち曇りのち雨 キャンプ場にて休養

今日も雲が多く北壁は見えない。天気が悪くなく時差の影響もあり疲れているので休養日とする。隣のテントのスペイン人からビールの差し入れを受ける。キャンプ場の冷蔵庫や電源を教えてもらい最終日までこれらの施設にはお世話になりっぱなしであった。このスペイン人、北壁を単独で狙っているというがだいぶ腹が出ている。私より年上で酒好きの陽気なオジサンだ。



午後はグリンデルワルトの街まで出かけ買い物をする。COOP以外にもリュチーネ川沿いにも買い物ができる店があったが、今日は閉店していた。山本のスマホによると明日から数日は好天になりそうだ。去年はシャモニのテント場に張り出されるメテオ(天気予報)が外れ苦労したが、今年は山本のスマホが大活躍である。またスイスのコンセントは三つ穴式で日本のコンセントは使えないが、山本が持ってきた変圧機を使ってキャンプ場の電源で充電することができた。

●7月16日(月) 快晴 キャンプ場—ユングフラウヨッホ—メンヒスヨッホ小屋—メンヒ (4099m) 南東稜アタッカー—メンヒスヨッホ小屋



【メンヒ(4099m) 右のなだらかな雪稜は東南稜 左の岩稜が南西稜】

待ちに待った快晴である。途中駅のグルントから乗ったが朝一番の登山電車なので座ることができた。途中、アイスメア駅からアイガーのミッテルレギ稜(東山稜)を見るが、昨日までの悪天で雪が降った模様である。ルートとミッテルレギ小屋がクローズされなければ良いのだが、と思う。

ユングフラウヨッホの駅に着きトンネルを抜けると素晴らしい景色が広がる。ユングフラウが背後に聳えたち左側にはメンヒ南壁が巨大なセラックを従えて展開する。目はすぐさま目標のメンヒ南西稜を追う。メンヒ

左側のスカイラインを形成する南西稜は岩場が多く、八ヶ岳の赤岳西壁を二つ重ねたような感じである。一方、南東稜は雪稜を主体として岩場が何か所か点在する感じで、南西稜よりも取



【メンヒ東南稜下部を登る】



【頂稜へ続く雪稜】

り付き点が高い分頂上までの標高差が少ないので楽に登れる印象を受ける。メンヒスヨッホの小屋を目指して歩いて行くとアレッチ氷河の雄大な流れが目に入る。さすが世界遺産に登録されヨーロッパ最長を誇る氷河である。この景色を見に来たんだよなあ…と感動をする。メンヒの南東稜に多くのパーティーが取り付いている。

小屋に荷物をデポしてまずは高所順応も兼ねて南東稜に登ることにした。今夜の宿泊の仮の予約を行い、女主人から「夕飯は7時からよ」と念を押され南東稜へ急ぐ。

午後の日差しで雪もすっかりゆるみアイゼン無しで登り始める。やさしい



【頂上直下 右側が北東壁】

岩稜が多いのでグングンと高度を稼ぐ。長めの雪稜が始まるところでアイゼンを着ける。時間的に登頂を終え下山してくるパーティーが多いので時間待ちが多くなるが仕方がない。長めの雪稜に登り更に雪壁に登りきると頂上に続く稜線に出る。小さい雪庇が北東壁側に張り出したこの雪稜、見事なナイフリッジで相当緊張する。北東壁も登山計画に入っているが、とても妻子持ちが登るルートではない。ものすごい傾斜の冰雪壁で見ても



【メンヒ頂上の古関 背後はユングフラウ】

ならないものを見てしまったような気分だ。皆アンザイレンしているが、パートナーが落ちたらとてもではないが止められるものではない。私たちはたとえ神風登山と言われようがロープを結ばずに歩いた。ヒマラヤのアタック時を思い出させるような恍惚感を感じながら長い雪稜を進む。風も無く快晴に恵まれ気分は最高に良い。ようやく頂上に立ち写真を撮る。目指すアイガーも良く見える。山本にとっては初めての4000m峰で、相当嬉しそうだ。すぐに下降に移り、ナイフリッジを慎重に下る。急な雪壁から3ピッチほどロープを出す。支点となる鉄柱が打ち込んである。傾斜が緩めばグングンと降りることができ、取り付き点で山本と固い握手を交わす。最高の気分である。饒舌になりながら小屋へ戻る。7時の夕食に充分間に合いうまいビール、ワインで夕食を愉しむ。



【頂上の山本 背後はアイガー】

メンヒ南東稜取り付き 13 : 15—メンヒ頂上 15 : 25—南東稜取り付き 17 : 50

南東稜の反省 雪稜の多いルートなのでカムやナッツ類を携行しなかった。片麻岩のメンヒではカムやナッツ類が有効である。

●7月17日(火) 風雪のち曇り レスト

夜中にトイレに行くと風が強く雪が舞っている。登山組の起床時間の3時に朝食をとって様子を見る。天候が回復しないのでレストとする。小屋の人が掃除やベッドメイキングを始めたのでゴロゴロもして

いられない。ユングフラウの駅見物に出かける。小屋唯一の日本人従業員の根本さん(埼玉県出身)と駅で一緒になりいろいろと楽しい話をする。レストランでビールを飲みながら食事をしていると、突然ガスが切れてユングフラウが姿を現す。明日の好天を期待しながら小屋へ戻る。年齢の関係もあるのだろうが、4000mを越えたところで活動をすると疲れが残る。昨年と同様、ヨーロッパの山小屋ではスープから始まってメインの食事が出て、デザートで終わるという素晴らしい食事が味わえる。それでいて宿泊料金は日本より安い。羨ましい限りだ。

●7月18日(水) 快晴 メンヒスヨッホ小屋—メンヒ南西稜—南東稜下降—ユングフラウヨッホ—グルントーキャンプ場

期待した通り満天の星空である。いつも通りの3時に起床、朝食をとってから少し時間をおいて出発する。南西稜へ向かって行く途中でユングフラウがモルゲンロートに染まっていく。美しい。南西稜へ取り付く手前でクレパス対策としてアンザイレンする。南西稜に一番で取り付く。取り付きの凹角は山



【メンヒ北西稜下部岩壁】

本がチムニー登りの要領で越える。アイゼン・手袋なのでなかなか厳しい。南西稜上に出ると傾斜もさほどなく快適な岩登りになる。つるべで登っていくとメンヒの北西面からヘリコプターの音がしてきた。遊覧歩行にしては時間的に早いなと思っていると、人をつり上げている。救助のようだ。山本をビレーしながら下方を見ると、コンテで登ってくるパーティーがいる。コンテなのでスピードが速くすぐに追いつかれてしまう。ガイドパーティーで客の女性は足さばきも良く南西稜の核心部の岩場で一緒になる。かつて近藤等氏の著書「アルプスの空の下

で」には「ピトンが三本も打ってある」とあったが、現在は岩場の取り付き点に一本残置ピンがあるのみである。大いにランナウトする。ガイドは客によるビレーもなしに軽やかに登っていく。さすがだ。ガイドは山本にアイゼンを外した方が簡単だとアドバイスしている。核心部の岩場を越えると傾斜が少し落ちる。振り返ると次のパーティーが追い付いてくる。三人パーティーだがコンテで登っているのですぐに追い付かれてしまうのだ。岩場の傾斜が緩くなってきたこと、頂上までまだかなりの距離があること、今日はメンヒスヨッホの小屋ではなくキャンプ場へ戻る

ことなどを考え、ロープを外して登ることにする。また神風登山である。ギャップを懸垂下降してメンヒの上部岩壁の登りにとりかかる。下部よりも雪の部分が多くロープを外しているのでスピーディーに登れる。登っていくに従い傾斜が増してくるが、バイルが二本なので安定感がある。二回目の4000mラインなので一昨日よりは楽だがそれでも息が切れてきつい。やがて岩場が終わり雪稜になってくる。左側の北西面は広い雪の斜面になっておりノルレンルートが合流してくる。トレースが付いており雪面のアイゼンの跡の状態から判断すると、今日登ったパーティーのトレースのようである。スケールの大きい北西面からメンヒを登ってみたいと思う。小休止して更に右側の雪庇に



【メンヒ北西稜上部岩壁】

気をつけながら登っていくと頂上に着いた。一昨日同様、天候に恵まれ多くの峰々が望める。とりわけ

隣のアイガーは岩質が石灰岩であるため灰色の巨大な山容は目を惹きつける存在である。是非ともアイガーの東山稜からメンヒまでの縦走は成功させたいと思う。頂上を後にし、目がクラクラするようなナイフリッジを下っていく。一昨日ロープを出した雪壁も今日はロープを出さずに慎重に下り、切れ落ちた岩場のみロープを出した。無事に南東稜の取り付きに降り立ち山本と固い握手を交わす。最終の電車にも間に合い電車内の荷物置き場の椅子に腰かけると発車間際に「Just in time!」と言いながら二人の登山者が乗り込んできた。アイスクリューを取り出すと口で吹いて中の氷を飛ばしている。どこを登ってきたのかと尋ねると、「メンヒのノルレンルートだ」と言う。我々が見たトレースの主なのはわからなかったが、ヨーロッパでは本当にアルパインクライミングが根付いていることを実感した。長いトンネルを抜けてクライネシャイデック近くから見たメンヒ、ユングフラウの北西面がとても大きく輝いて見えた。いつかは挑戦したいものだ。

メンヒ南西稜取り付き 5:40—頂上 14:00—南東稜取り付き 15:50

●7月19日(木) 晴れ レスト

天候の崩れが懸念されたが良い天気である。4000mを越えたところでの活動が続くと相当疲れがたまる。30代の頃、3年連続でヒマラヤを登っていたが、やはり若かったのだと思う。でも年齢に合わせた山行が実践できればとても幸せだ。60歳までは何とかヨーロッパの高峰を舞台にした登山、バリエーションルートでのアルパインクライミングを楽しみたい。天気も良いのでロープホルン小屋に上がろうと山本が電話をすると今日は空気がないとのこと、疲れもあるので休養日とする。山本もすっかり会話に自信が出てきたようで、小屋への電話などを自ら買って出る。時折日本語が混ざっていたが山本が明日の宿泊の手配を無事済ませた。洗濯も山本が率先してやってくれた。「自分がやってほしいことを先回りして実践する…」ヒマラヤの登山隊でよく言われたことだが、長期間一緒にいるのだからお互いの気配りとしてとても大切なことである。

昼前からグリンデルワルトの街へ繰り出す。アイガーが良く見えるテラスがあるレストランで食事をする。ビールを飲みながらアイガーの東山稜を目で追ってみる。今回の山行の目玉のルートであり成功させたいものだ。食事後、山本は地図を買い、私は自分用のセーターを物色する。COOPで買い物をしてキャンプ場へ戻る。ビールをプレミアムビールにしてみたらコクがありおいしい。ビールはロング缶で1本100円前後、プレミアムでも150円位、安いワインは1リットル入りで230円ほどだ。ユーロはCOOPやレストラン、ショップで使える。なお釣銭はスイスフランになる。



【グリンデルワルトの街 背後の岩壁はシュレックホルン】

●7月20日(金) 晴れのち曇りのち雨 キャンプ場—ラウターブルンネン—ズルワルト—ロープホルン小屋

山本のスマホの天気予報では今週末はぐずつき気味になりそうだ。標高が低めのロープヘルナー(2566m)の岩場で乾いた岩を味わう事にする。グリンデルワルトからラウターブルンネンまでは快適な鉄道の旅。ラウターブルンネンの街では有名なシュタウプバッハの滝が天空から水を落としている。教会の裏手の滝の水が地上に着くまでにほとんど風に舞って消えてしまう滝で、絵ハガキなどでよく紹介



【文豪ゲーテも感動した
ラウターブルンネンの街】

されている。ラウターブルンネンの駅から 20 分くらい歩いたところから 2 本のケーブルカーを乗り継いでズルワルトへ向かうのだが、運よく駅前に停まっていたポストバスがイーゼンフルー行きで 10 分少々で発車時刻だった。郵便物と一緒に乗客も乗せるこのポストバス、女性運転手が豪快なハンドルさばきでイーゼンフルーまで運んでくれた。半額バスはポストバスでも有効(3.6CHF)。バスを降りるときに「私は日本の郵便局員だ」と伝え、女性運転手も嬉しそうであった。イーゼンフルーからはケーブルカーに乗る。自分たちでドアを開閉するケーブルカーで地元の人の大切な足である。半額バスは使えず 8.4CHF だった。決して便数が多くないのに乗り継ぎがうまく行った

ことに驚くとともに感謝する。いよいよ気持ちの良い森の中のトレッキングである。照り返しの強い氷河や 4000m の希薄な空気の中にいた者としてはすこぶる快適である(私の靴がプラブーツであることを除いて)。カウベルの音があちらこちらでして桃源郷のような沢沿いの小道を歩いていく。ロープヘルナーこそ見えないがきれいなクラックが走った岩場が見え、ロープヘルナーへの思いが募ってくる。石灰岩の露岩が点在するアルプを登っていくとロープホルン小屋に着く。快く迎えてくれる。内装がリフォームされてとても清潔で落ち着く。夕食は私たちと二人のトレッカー、幼児を含む二家族でとても賑やか。外では雨が降っている。

●7月21日(土) 雨 レスト

朝起きると雨である。いろいろと考えてみたが、一日レストして明日の好天に期待することにした。午前中、私は小屋の人が勧めてくれた本を読み、たまっていた日記書きを済ませる。山本はカップを着てロープヘルナー周辺の偵察に出かける。今晚の寝室は新館へとのことで、窓の大きい木の香りが心地よい新館へ移動する。昼過ぎから飲み始める。COOP のワインを下からかつぎ上げたので心強い。夕食後も雨がやむ気配がない。

●7月22日(日) 晴れ時々曇り ロープホルン小屋—ロープヘルナー登攀—ロープホルン小屋

朝目覚めると快晴だ。おいしいコーヒーで朝食を済ませ、ロープヘルナーへ向かう。途中でガスにおおわれてしまい踏み跡も明瞭でなく迷ってしまう。ガスが切れたところでようやく方向を見定める。朝食の時間が遅かったことと、ガスによる道迷いで取り付きの時間が 11 時 20 分と遅くなってしまった。奇数



【ロープヘルナーの岩場】

ピッチは古関、偶数は山本が登った。1 ピッチ目を登り始めたところでガイドらしき人が下からルートの指示をしてくれる。

ランニングは新しいボルトで安心して登れる。石灰岩なのでクラックも多くカムやナッツも存分に使える。3 ピッチ目が終わったコルで先のガイドパーティーと一緒にになった。客によるとアイガー北壁も登った有名なガイドとのことで歳はとっているが軽やかなフォームで岩を登り、ま



【ロープホルン小屋の朝】

たそのスピードも実に早い。ガイドの真髄を見た思いだ。4ピッチ目の登りだしで一緒になったが、その後はすぐに引き離されてしまった。たぶんやさしいピッチはコンテで行くのだと思う。ロープヘルナーは鶏冠のような形をした岩場なので、途中2回の懸垂と、岩場から最後に懸垂する2ピッチを含め15ピッチで登った。標準のタイムを大きく超えてしまい駄目である。とてもグリンデルワルトへ戻れる時間ではなく、ロープヘルナーの基部から山本に小屋へ電話をしてもらおう。ロープホルンの小屋に着いたのはかなり遅い時間になってしまったが、いつものようにもてなしてくれた。感謝。



【ロープヘルナーの取付】

ロープヘルナー取り付け 11:20—ロープヘルナー終了 18:20—小屋 20:00

●7月23日(月) 快晴 ロープヘルン小屋—グルッチュアルプ—ラウターブルンネン—グリンデルワルト—キャンプ場

実に快適な朝だ。アイガー・メンヒそしてユングフラウのベルナー・オーバーラント三山が良く見える。「今晚は満員になるから泊められないわよ」と女主人。まさかの3泊4日になってしまったが、実に感じの良い小屋で去りがたい。いわば心の故郷のような存在だ。グルッチュアルプへの道も気持ちが良い。青い空、岩の白、森の緑、色とりどりの花々、そしてカウベルの音・・・スイスの原風景だ。森の



【グルッチュアルプへのトレッキング道】



【木々の間から望むユングフラウ】

木々の間からの三山がこれまた絵になる。グルッチュアルプからロープウェーでラウターブルンネンへ一気に下りる。数分後に発車の列車にザックを置いて私はトイレに、山本はジュースを買いにキオスクへ。トイレから戻るとなんと列車が動き始めているではないか！ インドみたいに扉が開きつ放しなら飛び乗ることもできるがスイスではそうはいかない。荷物を載せた列車を見送るしかなかった。駅員に相談すると「1時間もすればインターラーケンから荷物を載せたまま戻ってくるよ」と涼しい返事。それでも他の係員が列車に連絡を取ってくれ無事に荷物と再会することができた。「列車は黙って発車する」(妹尾河童・『河童が覗いたヨーロッパ』新潮文庫)のをまさに体験してしまった。キャンプ場に無事戻り、シャワーを浴びすっきりする。キャンプ場に隣接するレストランから山本がピザを注文する。大きさも味も良かった。

夜になるとアイガー北壁のアイガーヴァント駅の窓と東山稜のミッテルレギ小屋の二個所に照明の明かりがともる。特にミッテルレギ小屋の照明ははるか頭上に見える、あんな高い所を登るのかと、神妙な気持ちになってしまう。

●7月24日(火) 晴れのち曇りのち一時雨 キャンプ場—アイスメア駅—カリフィルン氷河—ミッテルレギ小屋

昨夜、天気予報が悪天混じりに変わってしまいアイガー東山稜(ミッテルレギ稜)を諦めるか大いに悩む。朝になるとまた良い予報に変わりアイガー東山稜行きを決断する。良いコンディションで登るのであれば、最低3日の好天が続いてほしい。クライネシャイデックからの登山電車は満員でまるで通勤電車のような。アイスメアの駅で降りて親切な駅員に氷河へのトンネルの入り口を教えてもらう。登山電車の進行方向よりにある展望用の窓がある部屋にトンネルの入り口がある。駅員がトンネル内の照明を付けて



【アイガー南壁にくり抜かれたアイスメア駅の展望窓 右下が出口】



【アイガー南壁 実に大きい】

くれる。降りをはじめ
てすぐ左側に外へ通

じるトンネルの出口があったが、懸垂用の支点も無くどうやらこれは違うようだ。山本が偵察に行きかなり下に出口があると言う。ヘッドランプを点灯して降りていく。トンネルはぐるりと左に旋回しており、足元は所々凍結している。今年はトンネルの一番下から氷河へ懸垂することなく移ることができたが、積雪の状況次第で出口のトンネルが変わるようだ。正午過ぎのため氷河の雪はグサグサになっている。ものすごい暑さだ。氷河上には大小いろいろな石が落ちており、落石が多い危険地帯であることを物語っ

ている。古いトレースを追って歩いて行くとやがて大きなクレパスが口をあけている。トレースはクレパスを渡っている。他に渡るところがないか探したが見つからずロープを出して確保することとした。体重の軽い山本に先行してもらおう。海外の山が初体験の山本にクレパスを渡らすのも酷な話だが、山本



【氷河から小屋を目指し壁を登る】

はだいぶ逡巡したのち「飛びます!」と言葉を残し対岸へ飛んだ。無事に渡り腰がらみで確保してもらい私も飛び移る。小屋までの距離がそんなに遠くないので遅い時間の出発としたが、電車も混むしそれ以上に雪の状態が悪くなるのでやはり早い時間の出発がアルパインでは鉄則である。反省。アイガーの南壁から幾条もの滝が落ちてきている。気温が高いのでどんどん雪が溶けているのだ。氷河上からミッテルレギ小屋へ登りだす地点を探しながら進むが、取り付け点がわからない。古いトレースは上に登っていると山本は言うが、雪が岩場から離れていて取り付けそうもない。カリフィルン氷河をだいぶ進んだところで岩場の乗り移りやす

そうなどころが出てきた。今度は私が「飛びます!」の番だ。うまく岩へ飛び移ることができアイゼンを外す。頭上は結構な傾斜の岩場がどこまでも続いている。クライミングシューズならいくらから快適に登れるだろうが、登山靴で行くしかない。少しでも登りやすい所を探しながら上へ上へと登っていく。途中で山本が「古関さん、こっちに来ない方が良いでしょう」と言う。どうやら悪場のようで「5級以上はありました」と肩で息をしている。いつ果てるかわからないような岩場をノーザイルで登っていくと

やがて岩場をトラバースしている踏み跡に出た。ところどころにケルンがあるので間違いはない。踏み跡は小屋を目指して続いており、着実に小屋が近づいてくる。だいぶ近くなってきたと思った頃からポツリポツリと雨が降り出した。小屋の直下の苦しい直登を済ませ小屋に入った途端に強い降りになった。



【左から二人目が榎有恒氏】



【国際山岳ガイドの藤原氏】



【小屋の食事もおいしい】

間に合ってよかった。小屋の中には日本人がいて「国際山岳ガイドの藤原拓夫と申します」と挨拶された。元G登攀クラブに所属していて九州で唯一の国際山岳ガイドとのことだ。お酒が好きらしく「ワインをシェアしませんか」とありがたい誘い、さっそく一緒に一杯始める。1921年にミッテルレギ稜



【小屋から見た東山稜】

を制覇した榎有恒氏が初登攀の記念に建設費のうち1万フランを資金提供して建てられたこの小屋、よくもこんな狭い所にと感心をする。十数年前に建て替えられ、とてもきれいである。扉を開けた所がキッチンとダイニングで左奥に寝室がある。寝室は三段ベッドになっており、相当な人数を収容できる。藤原氏によると小屋は今シーズン今日から営業だそうで女主人は今朝ヘリコプターで小屋に来たそうだ。東山稜は昨日登られたばかりでちょうど良いタイミングでの入山だ。今晚の泊まり客は6人、明日は40人だという。藤原氏とその客と4人でこれまでの山歴の話をしながら楽しむ。

夕食は白菜のスープ、たっぷりの生野菜のサラダ、おいしいパスタ、そしてデザートだ。アルプスの山小屋は豪華な食事を提供してくれる。ちなみに一泊二食で70CHF、5600円である。食後、明日の行動用のティーを入れておいてくれるとのこと、テルモスを出しておく。メンヒスヨッホの小屋でも同じサービスがあったが、スイスの山小屋のしきたりなのだろうか。

アイスメア駅 12:10—ミッテルレギ小屋 16:30

●7月25日(水) 晴れのち曇りのち一時みぞれ ミッテルレギ小屋—東山稜—アイガー頂上—アイガー南稜下降—南アイガーヨッホ手前岩稜上でビバーク

夜中に小屋の外にあるトイレに行くと満点の星空。トイレの横にキャンプ場から見えていた小屋のライトがこうこうと闇を照らしていた。ベッドに戻るが東山稜の登攀に興奮しているのか、一向に眠れない。3:30起床、4:00朝食。パンと紅茶、ココアなどをいただき5時過ぎに出発する。小屋の外にビバークしていた3人を含め4パーティー、9人である。急いでいたつもりだが我々はラストである。へ



【右東山稜を登り左奥メンヒを目指す】

ッドランプを点けて両側がすっぱり切れ落ちた岩のナイフリッジを進む。歩きにくいのでアイゼンを外すが、所々凍結した所もあり注意しながら進む。明るくなり上部を見上げるとかなり上部に登っているパーティーが見える。かなりのスピードだ。

コンテの技術がものをいう世界である。いくつかの岩峰を越え懸垂をするといよいよ太い綱の登場である。私の持ってきた



【太いフィックス】

たカラビナの開口部が一番大きなカラビナがやっとかかるくらいの太さ

【背後にミッテルギ小屋が見える】

で、まるで運動会の綱引きで使う綱だ。次に出てきた綱がさらに太く、とうとう私のカラビナでは通らなくなってしまった。仕方なくスリングでオートブロックにより綱とハーネスを連結する。支点の鉄柱を通るたびに外したり結んだりする煩わしさはあるが、カラビナのチョイ掛けよりずっと安心である。東山稜の初登攀を目指したパーティーをことごとく撃退した100mの壁もフィックスロープのお陰で攀じ登れるようになったが、ものすごい傾斜だ。近藤等氏の『アルプスの名峰』(山と溪谷社)によると、「みどりのアルピグレンから頂上まで一気にそそり立っている岩と氷雪の北

東壁は六級のクライマーを魅了してやまない。壁の基部の二一七〇メートルの地点から山頂までの高差は一八〇〇メートル近いから、ベルナー・オーバーラントで最も高い壁だ。」まさにこの壁を見下ろしながら登っているわけで、相当しびれる。遊覧飛行のヘリが盛んに飛んでくる。きっとヘリでは「登っている人を見ることをできてとてもラッキー！」とでも言っているのだろうが、腕の筋肉をプルプルさせながらスリングを掛け直しているこちらはたまったものではない。いくつもの岩峰を越えていくと雪稜になってきた。メンヒでだいぶ慣れたとはいえ、

雪のナイフリッジはとても恐ろしい。右側に落ちれば北壁をまっさかさまである。スタカットで進んだので時間がかかった。13時過ぎに標高3970mのアイガー頂上を踏む。いつの間にかガスにおおわれ頂上からの景色を楽しむことはできなかった。軽く食事をしてガスが切れるのを待つ。50mを1回、25mの懸垂を3回やりながら南稜を下降する。先に下降していた3人組が食事をしていたのでビバークかと尋ねると、食事をしているだけだと答える。彼らはアイガー西壁方面へトラバースしていくという。メンヒスヨッホの小屋は遠いし、登り返しがあるし、



【アイガー頂上直下の雪稜 左右ともスッパリ】

さらに昨日の寝不足の影響か私の体調がすぐれないのだ。人数が多い方が安心感もあるし彼らと一緒に降りたい気がしてきた。山本もそういう気持ちのようだ。少しばかり彼ら三人組と下りは始めるが正規

ルートではないのでガレ場のトラバースも悪い。やはり計画通りに遠くても安心なルートを取るべきではないか……心の中で葛藤する。ガスっている展望のきかない中を事故の多い西壁を下るのはやはりリスクが高い、という結論を出し北・南アイガーヨッホ経由で下山することにした。北アイガーヨッホの
コルまで下ると見事に岩質が変わり、アイガーの灰色の石灰岩からメンヒで見た茶褐色の片麻岩になった。アイガーの岩はクラックやリスが少なく支点を取りづらかったが、「片麻岩になってカムやナッツ
が使えます」と山本は大喜び。逆にいえば難しい所にはフィックスがベタ張りの東山稜ではカムやナツ
ツがあっても無用であり、必要最小限の軽量な装備で攻める方が理にかなっている。北アイガーヨッホ
を過ぎてからもアンザイレンが必要な岩場が進む。途中から雨混じりの曇りが降り出し暗澹たる気持ちに
なってくる。山本はかなり電波の状態が悪かったがメンヒスヨッホの小屋に電話をして、根本氏を呼ん
でもらって「(遅れているが) 夜の十時ぐらいには小屋に着けると思います」と告げている。私は時間
的にビバークになると思っていたので、「小屋はキャンセルしろ」と言ったが、電話が通じたことに興
奮した『モバイル・モード』のスイッチが入った状態で聞いていない。風向きが変わり雨混じりの曇りも
止みだんだんと景色も見えるくらいまで天候が回復してきた。北・南アイガーヨッホの間の最高点 3770
m に出る手前の部分でかなり強引な A o を使い小さなギャップから対岸の岩へ乗り移るところがあっ
たりして、いつまでも気が抜けない。夜の 10 頃まで明るいスイスではあるが、さすがに暗くなり始め
ビバークすることに決める。最高点の 3770m まで到達しなかったがもう少しの感じである。ハーケン、
カム、ナッツなどを総動員して身体とあらゆる装備のビレーをとる。ツェルトを被ってすぐは暖かさを
感じたが、じきに寒くなり山本が持参した

エマージェンシー・シートを掛ける。ツェルトから外へ顔を出すと遠くインターレーケンの街明かりが見えた。星も良く見え完全に天候は回復してきた。ガストン・レビュファの言葉を思い出す。「アルピニストのなかには、すべての山行をビヴァーク無しでやったことを得意がっているように、岩場だけの好きな人や、氷のコース、或は山稜や壁しか好きじゃない人もそうだ。山がたえず差し出してくれる数限りないよろこびをどれ一つとして拒絶してはならない。何一つしりぞけないこと、何一つ制限しないこと。渴望し、憧憬し、早く登る技術も、ゆっくり歩く術も身につけ、さらに静観もできるようになること。生きることだ!」(ガストン・レビュファ『星と嵐』白水社)。足元はアイガー氷河まで数百メートル切れ落ち、ただ腰かけただけのビバークだが、不思議と心は落ち着き満たされていく。山本と背中をくっつけると暖かくなり少しずつではあるが眠ることができた。



【メンヒ頂上からのアイガー 右スカイラインが東山稜
BP は手前に伸びる南稜からの尾根最高点直下】

ミッテルレギ小屋 5 : 10—アイガー頂上 13 : 05—南アイガーヨッホ手前岩稜上ビバーク 22 : 00

●7月26日(木) 快晴 ビバーク地—ユングフラウヨッホ—グルント—キャンプ場

それほど冷え込まなかったので楽なビバークであった。深い眠りではなかったが体調が良い。6時過ぎにビバーク地を後にする。岩場がまだ続きスタカットで進む。しばらく登っていくとヘリコプターが頭上を何回も旋回しだした。スイスのレスキューヘリのナンバー1414が機体に大きく書いてある！いったんは飛び去ったがしばらくするとまた近くを旋回する。嫌な予感がする。山本はヘリが氷河上に着陸して二人ほど降りたのが見えた、と言う。昨晚ビバークした私 たちを探しているのに違いない。岩場が終わり雪稜上を歩いて行ったところでその二人と会う。レスキューヘリのヘルメットをかぶった女性とおそらく山岳警備を担当す



【BP からさらに進んでメンヒ北東壁が近づいてきた。ヘリが飛来…】



【北アイガーヨッホのコルで岩質が変わる】

と思われる男性の二人である。男性から私達の名前を聞かれメモ書きの4名の名前を見せられる。そこには私達2名の名前と藤原ガイドパーティーの二人の名前が書かれていた。私たちは昨晚ビバークしたこと、健康状態は良好なことを説明し、彼らもそれを確認しメンヒスヨッホの小屋に連絡をするように指示をされた。推測だがメンヒスヨッホかミッテルレギかどちらかの小屋がヘリによる偵察を要請したのではないかと思う。正午ごろにヘリは飛び立ち私達もメンヒスヨッホの小屋へ向かう。カール状の地形のためとても暑い。メンヒスヨッホの小屋で根本氏と会い昨晚のお詫びをする。「大変でしたね。22時には着くと言うので22時30分まで待っていました」と根本氏、非常に申し訳なく思う。

小屋の女主人にもお詫びをすると「疲れているでしょ、泊まっていけば？」と暖かい言葉…この言葉に山本はグッと来たようだ。メンヒスヨッホの小屋の要請でヘリが飛んだわけでないことが分かった。私達4人の日本人の名前を知っているのはミッテルレギ小屋の女主人だけだから、昨日の私達の登攀のスピードが遅いのを案じてヘリによる偵察を依頼したのかもしれない。一晩の泊まり客の身を案じる小屋の主人の気遣いに感謝すべきだ。

ユングフラウヨッホからの下りの電車はさながら通勤電車のような混雑。キャンプ場へ戻りシャワーを浴び、ビールを飲みながら隣のレストランにオーダーしたピザを食す。頭上はるかかなたのミッテルレギ稜を見上げながら飲むビールのうまさ、この三日間の反省のほろ苦さが混在していた。

ビバーク地 6:10—メンヒスヨッホ小屋 13:30

●7月27日(金) 晴れのち雨 レスト

今日はレストとしそれぞれ別行動とする。古関は午前中に日記書きや洗濯物を乾かしたりし、午後はグリンデルワルトへ買い物に出かける。山本はレンタサイクルでグローセ・シャイデックやツヴァイリユチーネンまでサイクリング。夕方にキャンプ場の清算をする。山へ行っている間もテントは張りっぱ



【キャンプ場隣のレストラン】



【レストランのピザ宅配】



【レンタサイクルで観光】

なしだったので料金は変わらないが、山へ行って不在だった日数分の料金は割り引かれるシステムで、一人当たり 151CHF で一日当たり 1000 円といったところだ。昨年のフランスのシャモニーのキャンプ場とほぼ同額だ。シャワーを浴びているうちに夕立があり、大気が不安定になってきた。夕食後、雨が強くなり、バーベキュー用の小屋へ逃げ込みその中にテントを張って寝た。

7月28日(土) 雨のち晴れ キャンプ場—グリンデルワルト—ベルン—チューリッヒ—ドーハ(古関)・ドバイ(山本)

夜明け前にもものすごい雷雨になりバーベキュー用の小屋へ逃げ込んで正解だった。この週末は悪天が続くようで、良い時期に登山を終了できたことに感謝する。いよいよグリンデルワルトともお別れだ。シャモニーとはまた違った魅力を持つ街であった。またスイスに人は優しく親切な人が多かったのも印象に残る。グリンデルワルトからチューリッヒ空港まで本当に快適な列車の旅であった。今回の登山はチューリッヒ解散なので山本と固い握手をして別れる。

7月29日(日) 晴れ ドーハ—成田(古関)・ドバイ—成田(山本)

カタール航空とエミレーツ航空はたぶん競合相手だと思う。関西国際空港に寄らない分成田空港に2時間以上も早く着くエミレーツ航空。荷物の重量制限はエミレーツ 37 kg に対してカタールは 30 kg。しかし航空券の値段はカタール航空の方が安い……。さあ、来年はどこへ行きましょうか！

II. 会計報告

<国内支出>		<国外支出>	
渡航費 *注1	103,780 円	交通費	32,798 円
交通費	3,790 円	宿泊費	51,545 円
保険費	1,420 円	食糧・酒代	20,135 円
		みやげ代	23,913 円
		ガスカートリッジ(1個)	757 円
合計	108,990 円	合計	129,148 円

合計 238,138 円

①この支出は古関個人のもの。ガスカートリッジの代金は折半。

②宿泊費には小屋で飲んだ酒代も含まれている。小屋には合計で6泊。キャンプ場の代金は一人当たり12,867円で上記宿泊費に含まれている。

*注1・・・古関の航空券は本来123,780円でダブルブッキングによる値引きあり。山本の航空券は157,560円。

Ⅲ. 総括(文責 古関)

1. 昨年のフランス・シャモニーで一番悩んだ天気予報の入手については、山本のスマホで解決した。ただし気をつけないと相当高額な料金が発生する。私もグローバル・パスポートの携帯に変えたので、スイスでも日本でやり取りをしているメールもすべて受信していた。ただ日本へ電話する場合は、携帯を使わずにスイスCOMの公衆電話からコインで電話をかけた方が安い(ユーロのコインも使える)。

2. スイスは高所得・高物価の国なので日本人には何でも高く感じられる。しかし乳製品やアルコールは日本より安い。ホテル泊の人もCOOPで買い物をして自炊している人が多いようだ。調味料を小さく小分けした商品がない(ビッグサイズのみ)。調味料類は必要な分を日本から持参した方が良い。

3. スイスは三つ穴のコンセントで日本の電気製品の充電ができないが、変圧器(?)を使えば充電が可能になる。キャンプ場の配電盤(?)と冷蔵庫にはお世話になりっぱなしだった。ボーゲンワルトキャンプ場はグリンデルワルトの街から少し離れているが、景色も使い勝手も最高でレストランも併設されている。キオスク(売店)でアルコールやスナック菓子、頼めばベーカリーの注文や隣のレストランからの出前までやってくれる。

4. 交通費対策として「スイス半額カード」を使った。110CHF(9360円)するが、すぐに元は取れる。登山者のように特定の場所からさほど動かない人にはスイス半額カードがお勧めだ。「スイスパス」は年中移動する観光客ならばともかく、登山者には不向き。高額なユングフラウヨッホまでの登山鉄道もスイス半額カードは文字通り半額になるが、スイスパスの割引は半額にはならない。

5. コンテ技術をいかに使うか・・・昨年の課題を今年も持ち越してしまった。相手を止められないのならばコンテをすべきではないという反面、スタカットで行動しては文字通り日が暮れてしまうというジレンマがある。ちなみに国際山岳ガイドの藤原氏は大阪府岳連方式を使わないとのこと。またコンテ技術と関連して標準所要時間にいかに近づくか、という問題もある。標準所要時間よりも早く登れたのは神風登山のメンヒの南東稜だけで、それ以外ほどのルートもオーバーしてしまった。アイガーの東山稜では私の体調が悪かったりガスにおおわれたり悪条件が重なったが、私達が登った翌日のガイドパーティーは朝ミッテルレギ小屋を出発し、昼前には南アイガーヨッホの先まで到達しているのである。

6. アルパインクライミングというならば、山の頂上や稜線を目指すクライミングを楽しみたい。数値化されたグレードばかり追っているとグレードそのものが目標になり山が見えなくなる面があるのではないかと思う。日本の登山界はあまりにも数値化・細分化されすぎ、山へのロマンが失われていないか。彼の地では今もクラシックルートを登る人が多く、アルパインクライミングが山の文化として根付いている印象を強く受けた。